

文語唱歌「花鳥」

里見義ただし作詞 ウエルナー作曲

谷田貝常夫

一、山ぎはしらみて。雀はなきぬ。はや疾とくおきいで。書ふみよめわが子。

ふみよむひまには。花鳥めでよ。

二、ふみよむひまには。花鳥めでよ。鳥なき花咲き。たのしみつきず。

樂みつきず。天地あめつちひらけし。始はじめもかくぞ。

里見義は、明治三年に小倉藩にて國學を教授し、文法書を何冊か世に出せしが、「雅俗文法」と銘うちたることから、明治初期の文法において「童蒙の爲」に留意し、雅文調には拘泥せざる立場をとりたり。そこを見込まれたるか、明治十四年には音楽取調係に招ばれて、かなりの歳なれども上京せり。推するに文法書にも英語が顔を出し、東京にては宣教師の所に寄宿しをりしことなどより、基督教徒になりたる可能性あり。明治の初期クリスチャンは佐幕派の没落武士多かりしと聞く。當時來日せる南北戦争終了後のアメリカ人宣教師、ピューリタン精神から質素と奉仕活動を中心としたれば、同感せる日本人多かりしと。新渡戸稻造、内村鑑三もその例にもれぬが、瀧廉太郎、岡野貞一など多くの作曲家もキリスト教徒になりたり。

この唱歌「花鳥」、後の近藤朔風作詞の「野薔薇」と同じウエルナーの曲につけたる歌詞なるが、偶々この曲聞きしとき、伴奏はオルガンなり。あたかも讚美歌を聞くがごとくに思はれたり。幕末より明治に至る時期、歐米の宣教師活潑なる宣教活動を展開せるが、その時に必須の武器が、讚美歌とそれに伴ふオルガンなりき。當初和樂器を活用せんと様々なる摸索されたるが、東京藝術大學の前身、音楽取調係の伊澤修二、明治十三年に米人W・メーソン招聘せることにより、唱歌教育の必要性認めらるるに至り、明治十九年には唱歌教育必修となり、それに伴ひて、最終的には音程と音量の安定せるオルガン定着することとなれり。こゝまでを概観せば、日本に初めて出現せし「唱歌」なるものは、煎じ詰むれば、基督教の讚美歌より生れたるものと言ひ得。

明治二十二年、山葉寅楠、「山葉風琴製作所」を立上げ初めて國産のオルガンを作り出せるのに符牒せるが如く、「中等唱歌集」なる教材發表さる。全十八曲中十三曲が歐米の曲に、日本人歌詞を提供したるものにて、中にはモーツァルト、ベートーベン曲も組入れられたり。又この十八曲中、里見義の作詞五つあるところを見るに、當時音楽取調係の長老的存在なりし里見義が範を示せるところならむ。されど今なれば如何にも場違ひに思はるゝは、モーツァルトの歌劇「魔笛」二曲に歌詞を付たることにて、この人生の幻覺にも似た、夜の女王や鳥刺しパペゲーノの現はるる滑稽なる歌芝居に、「御稜威の光」(第九)、「ああ明治の御世や、ああひかりの世や、いかにかくこそ、かがやきぬらめ・・・」と眞面目を正面切つて打出したる作詞、その取合はせに啞然とさせられ、同時に明治初期の時代を感じさす。されど今一つの「魔笛」曲、平安時代の貴族藤原保昌を主人公とし、深夜都大路を笛を吹きながら歩き、盜賊袴垂を諭す情景には「ララ ラララ ララララ ララララ ララ

ララ」と合唱にて歌はせたるは、パパーゲーノの鈴による皆の踊りに合せたるもののごとくにて、原曲無視とばかりにてはなし。

里見義が作詞せる曲のうち、英國の曲による「埴生の宿」「庭の千草」は秀作なれども、「おおわがやどよ、たのしともたのもしや」と、雅俗入り交じれるは意圖的ならむ。更に言はば、ここに掲げし「花鳥」は、八分の六拍子にもかかはらず、八七八七七八七とフレイズが原曲を無視してをり、明治期特有の勉學推奨の語句「書よめ吾子」を繰り返す事もありて、後世誰にも歌はれず、ゲーテ原詩、ウエルナー作曲のこの歌は近藤朔風の「野薔薇」に席を譲りたり。

(平成二十九年九月十八日受附)